〈第五十六回日枝神社奉納書初展・山王奉書会記念講演〉

書のすばらしさ

内閣府辞令専門職　茂住修身氏

実は、私が書を好きになったのは大学に入ってからです。書を知る事になったきっかけは、大学で友達作りのために偶然入った部活が書道部だったからでした。書道部の人数は、私が部長を務めた三年生の時には三百七十人程いました。部長を務めましたが、一年生の時は書が上手ではありませんでしたので、毎日一生懸命稽古をしました。何故かというと負けたくないという気持ちがあったからです。この書道部は小学生や中学生の頃から、一生懸命努力して賞を取っているようなエリートが集まっている部活でした。従って、遅れをとっていた私は落ちこぼれでした。しかし、落ちこぼれのままでは悔しいという気持ちが湧いてきました。それと同時に、書の面白さや魅力にも惹かれていきました。その結果、書道に対する意識が変わり、仲間も増え、部長も務めました。その後、約三百七十人もの部員がいる書道部の部長を務めていることを学校から認めてもらい、就職の際に内閣府に推薦していただきました。このように、一生懸命やったら何かいい事があります。

私の場合は大学入学後に書が好きと言うことに気付き、それから一生懸命書に打ち込みました。もし、皆さんに合っているものや好きなものがあるなら、それに一生懸命打ち込んでください。私の場合は偶然、白と黒の世界である書というものが好きになり、この道に進んでいきました。何故、私が書を面白いと感じたかというと、真っ白な紙に何を書いてもいいからです。どんな言葉を書いても、

真っ黒に書いても良いし、白を多くしても良い等、どのように書いてもいいからです。皆さんの中には、自由ではあるけれど、手本が無いと良い字が書けないと感じている方も多いと思います。それも一理ありますが、それはまだ成長過程の段階です。出来る事ならば書が好きになる事によって湧き出てくるものを表現する事が一番良いと思います。

私が思う書の魅力について端的に説明すると、「時間」という概念がある事が挙げられます。書き始めと書き終わりには時間の経過

があります。そして、書には一回で書くという一回性というものがあります。これは絵画とは違います。絵画は色を重ねて、自分のイメージした色をつくります。一方で、書は一回で書かないといけないという瞬間の芸術です。そのため、気持ちを込めて書かないといいものが書けません。しかし、自分の気持ちや目のつけ処は時間の経過と共に変わっていく為、同じ作品でも違って見えます。違って見えるから良いのです。ですから、書の指導をされる先生方には出来ることなら「こうやって書きなさ

い」や「ここが手本と違う」というような事をあまり言わないで欲しいです。そして、生徒には気持ちを高めて書いて欲しいです。逆に言えば、書きたくない時に無理して書いても、いいものを書くことは出来ないので書かない方がいいです。字は何かを皆さんに伝えてくれます。ですから、そのメッセージを汲み取る事が出来るように、気持ちを上げて残りの書く枚数を決める、そしていいものを一枚書くという事が大切です。また、お手本通りに書けたのかどうかを気にするのではなく、気持ちを込めて書く事が何よりも重要となります。コンクールの選考もお手本と見比べて行っているわけではありません。作品だけを見ています。人に感動を与える、何かを伝える、そういった自分の思いを伝えるために、気持ちを込めて書く。その事によって筆にエネルギーが移り、エネルギーが字に入るため、字が喋ります。皆さんには、そのような字を書いてほしいです。

私は仕事として四月に令和という字を書きました。その字は多くの方がご覧になったと思います。しかし、見た人全員が良いと思ったわけではないと思います。違う意見があるのは当然ですし、そうあるべきだとも思います。ただ、あの令和の字は目的に沿って書きました。その目的とはこの字をこれから先、元号として使いますよということを世の中に伝えるというものでした。また、上の人からは活字に近いものを表現して欲しいと言われ、あの字を書きました。ただ、もし菅官房長官が掲げたあの令和の文字がゴシック体や明朝体のような活字で出ていたら、皆さんはどのように受け取ったのでしょうか。筆で書くことによって、皆さんがこれから始まる新しい時代に対して、凛とした雰囲気など、少なからず何かを感じ取ってくれたのではないかと思います。活字では伝わらない何かを持っているのが書の魅力や力だと私は思います。

（文責編集）